

氏名	しげ おか てつし 重 岡 徹
学位(専攻分野)	博 士 (農 学)
学位記番号	論 農 博 第 2343 号
学位授与の日付	平 成 12 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	農 村 生 活 空 間 の 再 編 と 景 観 形 成 に 関 す る 研 究 ——「活力あるふるさとづくり」の論理と現実——

論文調査委員 (主査) 教授 祖田 修 教授 稲本 志良 教授 高橋 強

論 文 内 容 の 要 旨

現代日本経済が高度成長・国際化を経て、停滞・混乱に至る激動の時代の中で、農業の低迷、過疎化の深化、高齢化の進行等により、日本の農村地域社会は全体として衰退状況にある。このままでは消滅・崩壊する農村集落も数多く現れてくることが予想される。本論文は、現代農村社会の危機的状況を克服する道筋、つまり農村地域社会の再生・再編に向けて、空間秩序再構築の方策を明らかにしようとするところにある。この課題に対して、筆者は主に農村社会学、農村整備学の立場から生活空間論を理論的支柱に据えて論理を展開している。

序論では、上記の考え方に基づく全体構想を提示している。

第1章では、生活空間についての理論的検討と、本論文の基本的枠組みを示している。地域社会を人間と生活空間との間に心身一体的関係の構築された「帰巢生活空間」として捉え、地域社会は住民にとって唯一無二の「やすらぎの場」であり「生活根拠」と考える。従って、農村地域社会の衰退は、住民の「やすらぎの場」の喪失を意味し、このままでは地域住民の生存の根源的な危機をもたらす。また「帰巢生活空間」は「現住の地域社会」と「ふるさと」という二つの意味を持つと考えて、その二つを再生・再編するために、現在の農村地域社会が直面している生活空間問題を提起するとともに、今後の道筋を「活力あるふるさとづくり」として展望しようとする。

第2章では、縦軸に地域社会を重層的空間構造という観点から捉え、横軸には農村地域社会の封鎖的村落から開放的な広域地域社会へという空間構造の歴史的变化を捉え、これらを基本的枠組みとして、土地利用・生活空間整備・景観秩序について、現状把握と課題抽出を試みている。さらに「帰巢生活空間」再編の道筋として「美しいむらづくり」から「活力あるふるさとづくり」の方向性を導き出そうとする。

第3章では、空間構造の最も底辺に位置する土地利用の問題について福井県三方町及び埼玉県江南町の調査をもとに、農村地域社会の開放化が進み広域地域社会に組み込まれることで、農業の利用以外の異質な土地利用が現れ、土地利用体系が混乱し、新しい土地利用秩序の再編が求められることになる点を具体的に考察している。

第4章は、農村生活の質的向上に伴う農村生活空間整備の推移について、主に土地改良事業の資料に基づき分析している。戦後における農村整備は、生活の質的向上にもなって食糧増産型から生産基盤型、そして生活環境重視型へ、さらに今日では農村停滞化の状況打破に向けた活性化型整備が必要となっていることを示した。

第5章では、住民の主体的な生活空間秩序の再編を意味する景観秩序について、山間村、山際村、平地村の各事例から探究している。現代の農村地域では空間構成要素における異質性の増大、科学技術への過度の依存、地域文化の衰退を主要因とする景観の混乱・荒廃の問題が生じており、新たな景観秩序理念の構築が求められる。新しい土地利用秩序の再編、活性化型生活空間整備の展開、そして新たな景観秩序の再編は、今日の農村地域社会を「帰巢生活空間」として再編するための主要課題である。

第6章では、これらを克服していく道筋として、まず住民の主体的生活空間の再編運動として、「美しいむらづくり」を提案する。生活空間諸要素の総合的調和的な充実をはかる「生活美」と、生活空間に対する愛情や愛着を喚起する「創造

美」を目指す「美しいむらづくり」は、住民主体の自覚的な運動を不可欠とすることを佐賀県神埼町の事例から指摘する。

第7章では、今日の農村地域社会が、農林業不振と過疎化・高齢化の中にあつて、停滞ないし崩壊の危機に瀕していることを鑑みれば、「帰巢生活空間」の再編は容易ではない。単なる理念の構築でなく、具体的に活力を伴うものでなければならない。「活力あるふるさとづくり」の実現は、第1に何よりも住民が「活力ある生活」を生活目標とすることが肝要であり、第2に豊かさ・美しさ・楽しさ・安らかさなどの価値実現を目指した村づくり運動が進められなければならないと論じている。

論文審査の結果の要旨

戦後における高度成長、国際化といった波は、農村社会を急速にかつ大きく変貌させた。本論文は、その変化を農村空間秩序の再編過程として捉え、3つの具体的な地域を調査する中で、その展開過程を検証するとともに、そこにおける問題、時代の変化を反映する段階的特徴や課題を明らかにし、同時にそれを類型化し、体系的・理論的に論述したものである。すなわち、戦後の農村整備ないしは村づくり・地域づくりの展開過程を、食料増産型、生産基盤型、生活環境重視型、そして今後の活性化型という4段階に捉え、その方向と理念を、「帰巢空間の形成」として提起したものである。

成果として評価できる点は次の通りである。

- 1 都市民にとっても農村民にとっても、元の居住空間あるいは現在の居住空間として、それぞれに意味のある空間としてのふるさと空間を「帰巢空間」と呼んでいる。そしてそのふるさと空間を、土地利用局面、生活環境局面、景観局面の3方向から創造的に形成・整備するという立場で、全体を構成している。それは従来の農業工学的発想に、新たなものを付加する地域環境創造学と言える。
- 2 その際自然的環境と人為的な風景とのたくまざる結合によって、美しい農村田園景観を創造しようとする観点に立つ。単に自然の保全、環境の保全でなく、自然を生かし、生活の利便を重ね合せ、美しい風景を創造するのである。このことは、環境問題、人間生活と自然の問題を考えたとき、農村民、都市民にとって、ともに必要とされている。
- 3 具体的事例を3つ取り上げ、福井県三方町、埼玉県江南町、佐賀県神埼町を詳細に調査し、そこから戦後農村整備の変化、混乱、問題点、残された課題を明らかにし、新しい動向や今後の理念について、抽象論に終わらず論述している。
- 4 帰巢空間としてのふるさとを国民共有の財産として、形成・創造していく見地を明らかにした。今後、農林漁業の再編・復興、社会経済的变化への積極的適応、地域福祉・相互扶助機能の新たな組織化、開かれた農村等々、総合的な視点の確立、主体的な運動、政策的支援によってはじめて、活力ある「帰巢生活空間」の再編を目指す「活力あるふるさとづくり」を推進することが展望できるとする。別言すれば、自主性から出てくる活力、豊かさ・美しさ・楽しさ・安らかさなど、総合的な人間的価値実現を目指した村づくり運動が展開されることを目指している。

以上のように、本論文は戦後農村整備計画の展開過程を明らかにするとともに、今後の方向と理念を、社会学的視点を導入して総合的に提起しており、農村計画学、地域計画学、農村社会学などの発展に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成12年10月20日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。